# 13［評論］『術語集Ⅱ』

［１］　わが国の〈宗教論〉のなかでレヴェルが高く、国際的にも評価されているものに、西谷啓治の「宗教とは何か」（一九五四年）がある。ところがこの論文でも、宗教というものは《何時でも、各人自身にとっての各人自身の事柄である》ということが、中心になっている。そこでは、《宗教は我々にとって何のためにあるかという問い》は、《宗教の本質からいって、問いとして間違っている》と明言されている。だが、①両者は、切り離せるものであろうか。

［２］　《宗教とは何か》ということを考える場合、私も《ひとはなぜ宗教心を持つのか》という、一見西谷の出発点と似たようなところから始めるが、その先に行くと違ってくる。私のその問いの重点は、《幻想といわれようとも宗教に対して人びとがなぜつよい願望を抱くのか》というところにあり、私はその願望を次のようにとらえている。［　　１　　］、われわれ人間の生命力がいわば＜逆光を浴びた＞ときに、気づき、意識するものとして、である。

［３］　通常、われわれ人間の生命力は、みずから発する光によって世界を照らし、秩序づけ、意味づけている。［　　２　　］、ひとがひとたび、何かに挫折感を感じたり、重い病いにかかったり、また死に直面したりするとき、これまで生命力の発した光によって照らし出された眼前の世界は、実在性を失い、無意味化してしまう。つまり、イメージや意味の凝集力である生命力のａスイタイによって、自分を中心に秩序立てられている見慣れた世界の風景は解体され、無意味化するのである。そのとき、われわれの②自我は、おのずと存在ｂコンキョを失って、自己の足下に底無しの虚無のｃ深淵を見るのである。

［４］　一般に宗教的意識の出発点とされる〈虚無の自覚〉である。だがその自覚とは、さらにいえば、人間の自然的な生命力がみずから発する光とエネルギーを失って、他からの〈逆光を浴びる〉ときに生ずる。われわれ人間の個体は、身体あるものとして、もともと受苦（パトス）的で、ヴァルネラブルな存在である。［　　３　　］、われわれは、世界や外界を自分の光で照らし出す前に、すでに何ものかによって働きかけを受け、その光の下に照らし出されている。ただ、生命体に力がみなぎり、それで世界や外界を秩序づけ、意味づけているときには、③自己の有限性に気づきにくい。

［５］　それに気づくのを妨げるものを、仏教では〈ｄ煩悩〉といい、キリスト教では〈邪欲〉という。これらはすでに、［　　　　　　　　Ａ　　　　　　　　］の発現を、価値・方向・光の逆転によって、宗教の側からとらえなおしたものである。宗教はこのように、〈逆光の存在論〉から成り立っているため、宗教についての多くの言述（ディスコース）はパラドキシカル（ｅムジュンした、逆説的）なものになる。通常の語法とは異なる特別の語法を生み出す。《無分別の分別》（鈴木大拙）とか、《④不合理なるがゆえにわれは信ず》（テルトゥリアヌス）とかのような語法である。

●語注

ヴァルネラブル＝非難、影響などを受けやすい。

■覚えておきたい語句

□４明言……………………はっきり言うこと。

□15自我……………………他者と区別された自分自身に対する意識。

□16虚無……………………何もないこと。空虚。

□16深淵……………………奥の深いところ。また、その底知れない奥深さ。

□19パトス…………………感情的・激情的な精神。←→エートス

□23煩悩……………………欲望・執着・怒りなど、人間の心身を悩ませ苦しませる一切の妄念（迷いの心）・欲望。

□24発現……………………現れ出ること。現し出すこと。

□26パラドキシカル………→逆説的（パラドックス＝逆説）

□26逆説的…………………普通とは逆の方向から真実を述べるさま。

【読みのセオリー】

★対比と対応に注意して読む

　評論には、対比的な二つを提示し、相互に比較しながら議論を進めるパターンが多い。何と何が対比され、どの説明や例、あるいは根拠がどちらに対応しているかを意識しながら読む。そのさい、たとえばＡについて述べる部分は実線、Ｂについて述べる部分には波線と決め、読みながら線引きをすると、文章が整理されてわかりやすくなる。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　空欄１〜３に入る言葉として最適なものを次から選べ。（４点×３）

ア　だが　　イ　つまり　　ウさらに　　エ　だから　　オ　すなわち

１［　　　］２［　　　］３［　　　］

問２　傍線部①「両者」のうち、一つは宗教そのものであるが、もう一つは何か。本文中の語句を用いて、二〇字以内で答えよ。（４点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②とは、ここではどのような意味で用いられているか。「〜自分自身」という答えになるように、本文中の語句を用いて説明せよ。（10点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（自分自身）〕

問４　傍線部③とあるが、逆に「「自己の有限性に」」気づくのはどのようなときか。それが具体的に書かれている箇所を本文中から抜き出し、最初と最後の五字で答えよ。【読みのセオリー】（５点）

〔　　　　　　　　　　〕〜〔　　　　　　　　　　〕

問５　空欄Ａにあてはまる言葉を、４段落から一〇字以内で抜き出せ。（５点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部④は「パラドキシカル」な「言述」の例として提示されているが、これがなぜ「パラドキシカル」なのか。わかりやすく説明せよ。（10点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　本文の内容と合致しないものを、次から二つ選べ。（５点×２）

ア　宗教に対して人びとがつよい願望を抱くのは、人間の生命力が常に逆光を浴びているからである。

イ　一般的に生命力を失って自分の足下に底無しの虚無を感じたときに、宗教的な意識が生じる。

ウ　自分を中心に秩序づけられた世界が崩壊したとしても、宗教の力によってそれらは再構築される。

エ　生命の力がみなぎっている状態も、宗教の立場から見直せば「煩悩」または「邪欲」につながる。

オ　宗教についての言述にパラドキシカルなものが多いのは、宗教自体に逆説的な性格があるからである。

〔　　　〕〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ衰退　ｂ根拠　ｃしんえん　ｄぼんのう　ｅ矛盾

問１　１＝オ　　２＝ア　　３＝エ

問２　宗教が何のためにあるかという問い（16字）

問３　世界を照らし、秩序づけ、意味づけている（自分自身）

問４　何かに挫折〜りするとき

問５　人間の自然的な生命力（10字）

問６　普通、人は合理的なものほど信じやすいから。

別解＝普通、人は不合理なものは信じがたいから。

問７　ア・ウ

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ後から選べ。

93ポストモダン（　　　）

94マンネリズム（　　　）

95パラダイム（　　　）

96ダイナミズム（　　　）

97モティーフ（　　　）

ア　ある時代に支配的なものの考え方。

イ　内に秘めたエネルギー。活力。

ウ　創作の動機となった主要な思想。主題。テーマ。

エ　近代主義を超えようとする態度。脱近代。

オ　型にはまり、独創性や新鮮味がないこと。

【解答】

93エ　94オ　95ア　96イ　97ウ

〔要　約〕

［２］段落における筆者の主張①

「人が宗教への願望を抱くとき」

　　　　　　に

［５］段落における筆者の主張②

「宗教についての言述の逆説性」

　　　　　　を加えてまとめる。

　　　　　　↓

　私は人びとが宗教に対して抱く願望を、人間の生命力が逆光を浴びたときに気づき意識するものとしてとらえる。宗教はパラドキシカルな存在論から成り立っているため、宗教についての言述は逆説的なものになりやすい。（100字）

〈筆者＆出典〉中村雄二郞（なかむら・ゆうじろう）一九二五（大正14）～二〇一七（平成29）年。東京生まれ。東京大学卒業。専攻は哲学。明治大学名誉教授。著書に、『考える愉しみ』『哲学の現在』『共通感覚論』『西田哲学の脱構築』『術語集』『かたちのオディッセイ』など多数。本文は、『術語集Ⅱ』（岩波新書、一九九七年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊差し替え

問２　傍線部①「両者」のうち、一つは宗教そのものであるが、もう一つは何か。最も適当なものを次から選べ。

ア　宗教が各人にとっての各人自身の事柄であること。

イ　宗教が各人自身の事柄であることが論文の中心になっていること。

ウ　宗教はわれわれにとって何のためにあるかという問い。

エ　宗教は何のためにあるかという問いが間違いであること。

オ　宗教が何のためにあるかという問いが間違いだと明言されていること。

［答］ウ

＊差し替え

問４　12〜13行目「ひとがひとたび、何かに挫折感を感じたり、重い病いにかかったり、また死に直面したりするとき」を抽象的に言い換えた語句を２段落から抜き出して答えよ。

［答］〈逆光を浴びた〉とき

＊新問

問８　３〜４行目《宗教は我々にとって何のためにあるかという問い》は、《宗教の本質からいって、問いとして間違っている》」とあるが、ここで紹介されている西谷啓治は、なぜそのように述べるのか。本文中から根拠を探して説明せよ。

［答］西谷啓治は、宗教を（各人自身にとっての）各人自身の事柄であると考えているから。

＊（語彙）追加

⑥リリカル　（　　）

⑦ロジカル　（　　）

カ　論理的　　キ　叙情的・情緒的

［答］⑥キ　⑦カ

■要約の方法　★段落関係をつかむ

《段落は、次のような関係になっている》

［１］　導入と問題提示

［２］　筆者による問題のとらえ直し、及び筆者の主張①（第３文）

［３］＋［４］　柱の文①の詳しい説明（①を支える説明。要約には省く。）

［５］　筆者の主張②（第３文）

《筆者の主張①②（＝柱の文）を中心に要約文を作る》

■本文の要約■

　私は人びとが宗教に対して抱く願望を、人間の生命力が逆光を浴びたときに気づき、意識するものとしてとらえる。宗教はパラドキシカルな存在論から成り立っているため、宗教についての言述は逆説的なものになりやすい。（101字）